

日本における海外修学旅行の目的地選定に 関する研究

松浦 直美

近年、国際的なテロ事件や感染症の流行などにも関わらず、世界中の国際観光者は増え続けている。その中で、日本の国際観光は欧米のものとは異なった移動パターンを持って発展しており、このことを考慮に入れた、欧米とは異なる視点からの研究が必要とされている。日本の国際観光の特徴は、いくつかの高度に制度化された観光形態から成り立っていることである。そこで本研究では、制度化された観光の典型例で

あり、また若いうちに経験することでその後の観光パターンに影響を及ぼす可能性があると考えられる海外修学旅行をとりあげ、まずその特徴を明らかにし、さらにその目的地が誰によってどのように選定されているのかを明らかにした。

この結果、海外修学旅行は、日本の海外旅行の中でも以下のような特徴的なパターンを持つことが明らかになった。まず、海外修学旅行の目的地は海外旅行に比べて上位数カ国・地域に集中する傾向があり、その推移についても、海外旅行の目的地はアメリカが単独で一位となり、近隣アジア諸国はここ十年ほどの間に徐々に伸びてきたのに対し、海外修学旅行の目的地は、近隣アジア諸国から始まり徐々に遠方の国・地域へ移行するという特徴を持っていることが分かった。また都道府県別に見た海外旅行の出国率が、東京、名古屋、大阪などの大都市圏を中心としているのに対し、海外修学旅行は西日本の実施率が高く、西高東低の様相を呈している。

海外修学旅行の目的地選定には様々な主体が関わっているが、最も影響力が大きいのは参加者である生徒ではなく、学校である。これは、修学旅行が教育課程に位置づけられた旅行であることから説明される。目的地選定に際してまず重視されるのは、安全性である。次に目的地への地理的な近さや旅費が重視される傾向にあり、このことが実施率の西高東低という特徴を生み出す一因となっていると考えられる。公立

高校では特に各都道府県・政令都市の教育委員会によって修学旅行の実施基準が定められており、旅行期間や旅費などの条件によって目的地が絞られ、海外の目的地は近隣アジア諸国が中心となる傾向がある。また、少子化や学区制の廃止によって、学校が生徒確保に向けて魅力ある学校づくりの一環として海外修学旅行を位置づける場合や、小学校や中学校で生徒が既に訪れた場所を避けようとする場合など、海外が目的地として選択される積極的、消極的理由があることが明らかになった。さらに、同じ目的地を何度も訪れることで、担当教員に修学旅行が一定の型にはまってしまい、新鮮さが失われる「マンネリ化」という感覚が生まれることが、目的地を変更する要因となっていることも分かった。

このように、海外修学旅行は日本の海外旅行の中でも独特の特徴を持ち、その目的地は様々な要素の「兼ね合い」によって選ばれていることが明らかになった。